

□ 次の文章は、西アフリカのギニアにあるボツソウ村で、筆者たち研究者が、石器を使ってアブラヤシの種の中にある胚(やがて芽になる柔らかい部分)を取り出して食べる、野生のチンパンジーの「ヤシの種割り」行動を観察したことが記録されたものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

こうしてみると、ヤシの種割りができるようになるまでに、最低でも三五年かかる。もし ^aコウリツという観点も ^bドウニユすれば、技術の洗練にはさらに年月を要する。おとなと同じようにヤシの種割りができるようになるのは、約九歳ごろまでかかることがわかった。ここで注目すべき最も重要な点は、はやくても生後三年半かかって石器が使えるようになるまでのあいだ、チンパンジーが石や種を扱う行動は、一度としてその途中の過程で「①食物強化」されていないということだ。

石をどんなにじょうずに扱えるようになっても、種が割れるようになるその一線を越えなければ、中の胚は手に入らない。だから三歳半までの「上達」の過程は、食物を報酬とする学習ではない。

いつさい食物報酬がないのに、石や種を取り扱うしかたが進歩していく。どうしてだろう。おそらく、「模倣できる」ということが重要な鍵を握っている。おとなと同じように石を持てた。おとなと同じように石で叩けた。おとなと同じように種を台に乗せられた。そうした個々の行動の断片を「達成できた」ということそれ自体が、行動を進歩させていく原動力になっているのだろう。

ボツソウの※1「コミュニティ」には、おとなになってもヤシの種割りのできない者がいる。※2「ナと※2「パマの二人である。②しかし、ナ

の子の※2「ナ、パマの子の※2「ブルーと※2「ピリは、いずれもヤシの種割りができる。親は道具を使えないのに、子どもはできるようになる。だから道具を使えるようになる遺伝的な要因があるわけではない。道具使用は、子どもが親をはじめとしたまわりのおとなから学ぶものなのだ。ナやパマの子どもたちは、親から一度として手本を示してもらっていない。また他の子どもたちのように、親が割った種の胚をもらうこともない。手本も示されず、胚をもらうことも一度としていないのに、どうしてできるようになるのだろうか。

そこで、ナの子の※2「ント一歳半、パマの子の※2「ポニ二歳の成長のようすを、0歳のときから観察している。この二人の子どもの成長のようすを見ると、二人とも他の子どもと同じように石や種をもてあそんでいることがわかった。基本的には、親の影響というより自分自身の内部からかりたてるものがあるようだ。他のおとなたちが使った石を使って、自分たちもヤシの種割りにかわる行動をはじめた。今までのところ、親ができるかできないかで、子どもの進歩に差は認められない。

逆に※2「ヨという母親はヤシの種割りが「トクイだが、その子どもの※2「ユンロはヤシの種割りができなかった。このばあいは、ユンロが四歳のころにわなにかかって片足が不自由だったことが大きく影響している。ここでも本人の学習の機会が重要で、 は小さいと考えられる。

チンパンジーのコミュニティはその内部に、常にメンバーを入れ替える流動的な※3「パーティーをもつ。そういう社会のしくみも、学習の機会を増やすという点で重要だろう。チンパンジーの子どもは、コミュニティのすべてのメンバーといろいろな組み合わせで関わりをもつ。母親だけがすべてではない。兄や姉やほかのメンバーが、母親のかわりに「教師」の役割をはたしている。

野生チンパンジーの母親は、手取り足取りして子どもを教育したりしない。石器の使い方は、子どもが主体的におぼえるものであって、母親が積極的に教えるわけではない。

「この種、おいしいから割ってごらん」と、種を渡す。

「この石をハンマーにしてごらん」と、自分の使っている石を与える。

「こうして石を握るんだよ」と、子どもの手に自分の手を添える。

ヒトの母親ならきつとそんなことをするだろう。ことばに出さないまでも、てごろな種や石を与えたり、手を添えたりしてもよさそうなものだ。しかし、チンパンジーの母親はそうしない。

母親のようすをじつと観察する。母親が割った種から胚を横取りする。母親が割ろうとしている種を取って自分で割ってみる。自分の持っている種を母親の台石の上に置いて母親に割らせる。母親が場所を変えたあと、母親が使っていた石のセットを使う。

すべて、子どもの方から自分で母親に働きかけるのだ。まるで動きの感触を確かめるかのように、母親がハンマーを持って振りおろす腕に自分の腕をかけることもある。しばらくそうしたあと、自分で石を拾って、自分で割ろうとする。

教育の方法について考え直してみよう。教師がいて、教科書やマニュアルがあつて、口で説明する、手をとって教える。そればかりが教育の方法ではない。人の社会でも、伝統的な技術の伝承などは、親方の仕事を弟子はただひたすら観察するだけだ。

寿司職人のばあいを想像してみよう。「見習い」、それが弟子のやるべきことを言い表している。親方の握る手つきを見る。できあがった寿司のようすや大きさをよく見る。皿を洗いながら、目標とすべき立ち居振舞いをひたすら見ることに時間をかける。そしてある日突然、親方が使っていた包丁や箸といった道具を使うことが許される。見よう見まねで自分でやってみる。

寿司はこうして握るのだと、親方が弟子の手に手を添えることはないだろう。弟子用の道具を用意して、これで練習しなさいとも言わない。ましてマニュアルがあるわけでもない。寿司職人にかぎらず、伝統的な技術の伝承では、コウトウでの説明が省かれ、とにかく見ておぼえることが ^eジユウシされる。チンパンジーの石器使用の習得過程を見ると、そうした寿司職人の姿がだぶって見えた。

子どもは親の背中を見て育つ。親は、自分が生きていく姿を通して子どもを「教育」する。考えて見れば、あたりまえのことが、ごく自然におこなわれている。それがチンパンジー流の教育のしかたなのである。

(松沢哲朗「チンパンジーはちんぱんじん」／一部原文を変更しています。)

〔語注〕※1「コミュニティ」：共同体、地域社会の意。ここは、ボツソウ村周辺に生息する野生のチンパンジーの地域集団を指す。

※2「ナ・パマ・ナ・ブルー・ピリ・ント・ポニ・ヨ・ユンロ」：いずれも筆者たちがボツソウの野生のチンパンジーに付けた名前。

※3「パーティー」：ボツソウのコミュニティの中の小さなグループ。特別な場合を除いて、通常はこの「パーティー」の単位で行動している。

問一 波線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

a コウリツ

b ドウニユウ

c トクイ

d コウトウ

e ジュウシ

問二 傍線部①「食物強化」を説明したものとして最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 食料が不足しているため、ヤシの種の胚まで食べる。

イ 種割りができないとき、代わりに親から食物をもらうこと。

ウ 胚を食べられることが、石器の練習の励みとなるということ。

エ 親が割った種の胚を、お手伝いのほうびとしてもらうこと。

問三 傍線部②「しかし、二ナの子のナ、パマの子のブルーとピリは、いずれもヤシの種割りができる」とありますが、親は種割りができないのに、どうして「ナ・ブルー・ピリ」は種割りができるようになったのですか。くわしく説明しなさい。

問四 [] を補うのに適した語句として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 達成感の度合い

イ 上達の可能性

ウ 横取りの機会

エ 親の影響

問五 本文について述べたものとして、正しいものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

ア チンパンジーに関する記述の中に、普通は人間にしか使わない表現が用いられている。

イ チンパンジーの観察を通して、教科書やマニュアルに頼るヒトの教育が否定されている。

ウ 母親が割った種から胚を横取りする行為も、石の使い方を見て覚える学習過程の一部である。

エ ニナやパマが種割りができないのが、遺伝的な原因によるものかどうかを確かめるために、ントやボニを観察している。

オ 観察の結果、チンパンジーの教育のしかたは、人間の場合と比較してまったく違いがなかった。

二 次の文章にでてくる「あたし」（加津子）とその仲間山の中の小さな小学校の六年生である。学校に持って行く薬草を採るために山の中に入ってしまったのだが、迷ってしまい、四日目の朝になった。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「加津子う、加津子う。」

あたしは登にゆすりおこされていた。

「ね、みんな、きょうこそ、人の通る道まで出なけりやだめだ。おれな、すぐそのササんに、クマのふん見つけたんだ。クマに見つかったら、やられる。ここから脱出しなきゃ……。」

クマときいて、あたしらはふるえあがった。ゆりえまで立ちあがったほどだ。敏之はにげるつもりだったのか、ふらふら歩きだして、クマザサのがけをころがりおちた。全身くたくたで、なまずがくらげだから、けがはしない。①今になって思うと、どうやら、これは登のつくりごとみたいな気がする。登はクマをもちだして、あたしらがぼうつとなっているのをよびさまそうとしたにちがいない。

「な、おれ、上に出る道かんがえてみた。ここはずうつと細いはこの底だろ。でも出口はひとつある。あのたきだよ。いつかおれ、ダム工事の※₁人夫が、たきのはなししているのきいたことがある。だからもし、あのたきがダムの人ののはなしするたきなら、そこから一時間くらいで、ダム工事の※₂飯場に出るはずなのだ。」

あたしらはぼんやりと、登のいうことをきいていた。登はなにをいおうとしているのだろう。登がなにか、たいへんな決心をしているのが、あたしにはわかった。

あたしはこんないきいきしている登をはじめて見た。

「でもみんなつかれてる。ことに健やゆりえちゃんはずうけない。だから……、おれ、ひとりたきをのぼって、ダムの人たちに助けをたのむ。」

「……………」

「いいかい。それまでがんばっていてくれ。ね？ わかる？ わかるかい？」

登は、またすわりこんだゆりえの耳に口を近づけていった。

「たきなんて、のぼれるの？」

「右がわにクマ道らしい、細い道があるんだ。おれ、見つけてきた。」

「あたしもいく。」

「ううん、おれがおっこつたら、加津子ちゃんやつておくれ。それより、みんなをたのむ。」

登はみんなのしよいかこの中のなわをつなぎたした。

あたしは、たきの下までというやくそくで登についていった。

登はほんとうにのぼりはじめた。ふといフジのつるにつかまって、第一の岩に足をかけた。

しかし、さすがの登も足がもちあがらないのであった。

おなががすきつて力のないのは、みんな同じのはずだ。あるいはみんなよりつかれているかもしれないのだ。あたしらのため、※₃ウドを見つけてきてくれたり、水をくんでくれたりするの、いつも登だったのなもの。

手をのばすのさえ、足をもちあげるのさえどんなにつらいか……。あたしはふらふら立ちあがって、登のおしりをもちあげてやった。

②登は肩でいきをしている。ちっともはかどらない。あたしは、こんなところで何のてつだいもできないのがつらかった。

たきの水けむりで、もう登は、びしょぬれになっていた。それでも登はやめようとしな。岩に手をかけて、なんとかはいあがろうと、力を

ふりしぼっているものであった。下であたしはなきながら、いっしょに力をいれていた。登はつぎのしゅんかん、水しぶきとカエデの枝の中に見えなくなった。

落ちた！

③ あたしはせずじがつめたくなった。しかしそうではなかった。カエデの上から、登は頭をだしたのであった。それから上は、ほとんど垂直のきりたつたがけであった。それでも登はあきらめるようすはない。

登はなわの先を輪にしてなげている。上の岩にひっかけるつもりだろう。すさまじいたきのしぶきは、たえず登にかかる。どうしたはずみか、ざぶつとかかることもある。どんなにつらいだろう。

あたしはそつと水のふちまでおりていって水に足をひたして見た。水はしびれるようにつめたかった。

なわの輪が岩にかかった。登はなわにぶらさがつてためしていたが、がけに足をかけ、のぼりはじめた。

「神さま、どうか、登を助けて。登はあたしらのために、たったひとりで、がけをのぼっているんです……。」

④ あたしにできるのは、いのることしかない。

登が頂上のつきでた岩にすがりつき、それからその岩にのるまでがいちばんたいへんだった。

下にいるあたしには、登がうんうんいいながら、なんとか岩の上に出ようとがいているのが、銀色の水けむりをとおして見えた。

しかし、とうとう、その登が岩に足をかけ、あごまで使つて、上にきえたとき、あたしはおうおういいていた。

あたしはのろのろたちあがり、みんなのところへかえつた。みんなはぼんやりすわっていた。⑤ それから助けがくるまでの長さといつたらな

かった。

もしかしたら、登はたきの上で力がつきてたおれたんじゃないだろうか。クマにでも会つて、やられたんじゃないだろうか。

かなりたつてからであった。

とつぜん、「おうい。」という声がしたように思った。

「おうい。」

やはり人の声だ。敏之も幸助も、**b 頭をもたげた。**

流れのわきのクマザサの中を、きいろい鉄の安全帽をかぶつた人たちがやつてくるのが見えた。

「健ちゃん、ゆりえちゃん、助かったのよ、助かったのよ。」

あたしらはダム工事の人にせおわれて、山向こうの町の旅館についた。

村からまっ先にかけてきたのは、高井先生だった。あたしらが「神かくし」にあつて四日間、先生はちつともねていなかったそうだ。

村の人たちが、みんな、もうだめだといつても、先生ひとり、

「いや、ぜつたいに生きてる。」

と、信じていたそうだ。

高井先生が旅館にかけこんでくるころには、あたしらはみんな、元気になっていた。

ゆりえは、

「旅館のおかずつてね、先生、※4 おこうこがすくなくつて、まがぬけたみたいよ。」

と、あまえていった。

健や幸助や、敏之はとくになつて、じぶんたちの冒険をじまんしていた。

ただ、登……ほんとうにじまんしていい登だけは、また、のろまのぼんやりにかえつていたのであつた。

あたしが、登をそつと横目でうかがうと、すりきずやうち身でむらさき色になった手や足をなでながら、にこにこしているのであつた。

(岩崎京子「神かくしの山」／一部原文を変更しています。)

〔語注〕※1 「人夫」…土木作業や荷物の運搬などにたずさわる労働者。

※2 「飯場」…土木工事などの現場で働く労働者の簡易宿泊所。

※3 「ウド」…ウコギ科の多年草。若い茎は食用になる。

※4 「おこうこ」…香の物。漬け物。

問一 波線部 a・b のここでの意味として最もふさわしいものを次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「なまずかくらげ」

ア 体に力が入っていない状態
イ 体がびしょぬれになっている状態
ウ 体が動かせない状態
エ 体がなままっている状態

b 「頭をもたげた」

ア 思わず首をかしげた
イ がっくりと肩を落とした
ウ はつとして顔を上げた
エ おびえて後ろを向いた

問二 傍線部①「今になつて思うと、どうやら、これは登のつくりごとみたいな気がする」とありますが、「あたし」はどうしてそういう「気がする」のですか。その理由として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 最悪の状況を想像させ、今はこれでもまだましな方なのだと皆に思いこませるために登はクマの話を持ち出したのだ、という考えに至ったから。

イ このままでは自分が悪者にされてしまうのではないかと思い、責任逃れをするために登はクマの話を持ち出したのだ、という考えに至ったから。

ウ 皆が暗い表情をしていたので、おもしろい嘘をつくことで場の雰囲気明るくするために登はクマの話を持ち出したのだ、という考えに至ったから。

エ 皆の健康状態から考えて今日こそ何とかしなければ危ないと思い、皆に気を確かに持たせるために登はクマの話を持ち出したのだ、という考えに至ったから。

問三 傍線部②「登は肩でいきをしている」とありますが、このときの「登」について説明したものとして最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 皆を助けるためには自分がたきをのぼるしかないという気持ちで、疲れて力がつきかけている中で何とか体を動かそうとしている。

イ 皆を助けることで先生や親など、大人たちからほめられたいという思いで、懸命になって休むことなくたきをのぼっている。

ウ 皆を助けるためには自分がやるしかない、という思いでたきをのぼりきったが、疲労がたまりくじけそうになっている。

エ 皆を助けるためにはたきをのぼるしかないと分かっているが、なかなか思い通りにならず、自分の無力さにうちひしがれている。

問四 傍線部③「あたしはせずじがつめたくなった」とありますが、どうしてですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア たぎの水が自分の背中にまでかかってきて、冷たかったから。

イ 登がたぎの上から落ちたのではないかと思い、ぞっとしたから。

ウ 後ろから誰かが叫んだような気がして、驚いたから。

エ 自分がのぼるはめになったことを直感し、緊張したから。

問五 傍線部④「あたしにできるのは、いのることしかない」とありますが、このときの「あたし」の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 登が自らの危険をかえりみず、たきをのぼって自分たちを助けてくれようと必死に努力をしているので、何とか無事でいてほしいと懸命に願っている。

イ 自分だけが助かるために危険な行為をしている登に対して、あきらめてもいいから死なないでほしいと願っているが、今さらそれを伝えようもなく、あせりを感じている。

ウ たきをのぼりきることの難しさを分かっているながらもそれに挑む登の無謀さにあきれられる気持ちと、無理をして命を落としたら元も子もないという気持ちが入り交じっている。

エ 登がたきをのぼりきることは不可能であるのにそれを止めようとしなかった皆を責め、せめて無事を祈ることで登がたきをのぼる後押しをしたいと思っている。

問六 傍線部⑤「それから助けがくるまでの長さといったらなかった」とありますが、どうしてそのように感じたのですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大人たちが登の話を信用してくれず、助けに来てもらえないのではないかと不安だったから。

イ なかなか助けに来てくれない大人たちに対し不満を覚え、それが次第に大きくなっていったから。

ウ 精神的に落ち込んでいた皆を目の前にして、どのような言葉をかければよいか考えていたから。

エ 皆の状態が不安な上、大人たちのいる所まで登が無事にたどり着けたかどうか心配だったから。

問七 「登」はどのような人物として描かれていますか、答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本の産業界には「外国人労働者は受け入れてもいいが、来るなら単身赴任^{ふにん}にしてくれ」という①のいい主張がある。この点について、外国から労働者を受け入れてきたほとんどのヨーロッパ諸国は、まったくちがう立場をとっている。今でこそ、かなりきびしく制限しているが、原則的には家族が同居するのは基本的な人権の一部で、それを規制することはできないという立場である。トルコ人をはじめとする外国人労働者が大量に定住して大きな②プタン^{putan}になっているドイツでさえ、この原則だけは今でもくずしていない。

日本企業の経営者たちは「労働力は③カクホ^{かくほ}したい。だけど家族が定住すると子どもの教育問題やら何やらができてやっかいだ。日本人だって単身赴任は④珍しくないんだから、外国人労働者にもそうしてもらおうじゃないか」という論理を組み立てているのだから、こういう主張は、発展途上国の人びとにとっても、また、すでに外国人労働者を受け入れてきた国からみても、あまりに人権感覚に欠けている。

日本で、単身赴任は⑤人権蹂躪^{じんけんじゅうりよく}だといっても、社会的にはほとんど理解を得られないだろう。しかし、トルコ人もそうだけれど、世界には家族が離れ離れに暮らすということをつたいへん苦痛に感じる人は大勢いる。日本人は⑥それを知らなければいけない。日本にいるイラン人労働者に「家族の写真を持っているかい？」とたずねてみるといい。ほとんどの人がにっこりほえみながら、大切にしまっている妻や子どもの写真を財布^{さいふ}の中からとりだして見せてくれる。

自分のものさしで相手をはかるときにはなんの痛みも感じないが、⑦相手のものさしを自分に押しつけられるとどう思うか、そのことを知らないと、日本人は国際社会で自分の意見を相手に理解させることはできない。

トルコ人の貧しい人たちのなかにも、じつは日本に出稼ぎに行きたい人たちがたくさんいる。私自身、相談を受けたことが何度もある。その友人に、最後に日本行きをあきらめさせたのは、私とのこういう会話だった。

「よし。君が日本に行つて、どっかの工場で働いているとしよう。そこに、トルコから君の親戚がたずねてきて、空港から電話をくれたらどうする？」

「もちろん、ムカ^{ムカ}えに行くさ。あたりまえじゃないか。遠い故郷から親類がおれを頼^{たの}つて来たら、トルコにいたってそうするさ」

「もうひとつ。君の奥さん^{おくさん}から、子どもが急病になったから帰つてきてくれつて手紙が来たらどうする？」

「もちろん、飛んで帰るさ」

「トルコ人の君がそう考えるのはまったく当然だと思うよ。私もそうするのが当然に思える。でもね。日本の社会じゃ、それは必ずしも簡単に認められることじゃないんだ」

「そんな、ばかな」

「いや、ばかげたことじゃないんだ、日本では。家族が病氣になったり、親戚がやって来たぐらいで仕事を休むような日本人は、むしろ珍しいといつてもいい。」

君も知ってる日本人のAさん。最近日本に帰っただろう。帰ってから、日本のある役所で働いているそうだけれど、毎晩、家に帰るのは夜中の三時ごろだそう。そして四時間ほど寝て、また働きにいくそう。子どもと話をするのなんて、休みの日ぐらいいい。休みの日だって仕事があれば出ていくんだ。そう、おまけにね。日本では夜中の三時まで働いたとしても、その分の超過^{ちゆうぐわ}キ^ム手当てを全部払^{はら}えなんて要求する人はいないんだ。もちろん法律では、よけいに働いた分の給料を支払^{しはら}わなければいけないことになってるけど、実際にはただで会社や役所の仕事を夜遅くまでするんだ」

「なんて哀れな……」

「いいかい。私は、こういう日本の※²労働慣行がいいことだつていうつもりはない。日本でも、最近は働きすぎになることに疑問を持つ人たちはふえている。しかし、そういうふう動いている社会を急に変えてしまうこともむずかしいんだ。日本では、会社のような外の社会のほうに家族よりも優先されることがとっても多い。そういうところで君が働くのはとっても大変だし、いやになるんじゃないかな」

「④おれには無理だな。そんなところで働くのは……」

トルコでは、子どもが病氣といえ、仕事を放り出して家に帰ってしまう父親はめずらしくない。休日は家族でいっしょにすごすのがあたりまえである。父親（もしくは夫）が週末に仕事にでかけたり、自分だけの楽しみのためにでかけたりすると（だいたいそんなことしないけど）、よほど身勝手な男と思われてもしかたがない。

⑤「ここがむずかしいところで、子どもの病氣でいちいち仕事を放り出していたら、日本の経済はここまで発展したか？」「ここまでゆたかになったか？」といわれれば、それももつともである。日本とはちがう※³価値観の社会をいちいち手本にすべきだというのはない。日本には日本^eコ^ウウの価値観があるのは当然だし、どうしたつてゆずれないものだつてある。

けれど、トルコの人びとにかぎらず、外国の人たちが何を大切にしているかを知らずに、頭から遅れていると決めつけたり、進んでいると思いきいこんでいけるのは、自分本位のものさしで相手をはかっているにすぎない。これでは相手を理解したことにはならないのだ。

（内藤正典『トルコのものさし』／一部原文を変更しています。）

〔語注〕※1「人権蹂躪」…人間が生まれながらに持っている基本的な人権をふみにじること。

※2「労働慣行」…仕事をする上でのならわし。

※3「価値観」…価値判断の基準となる考え。

問一 波線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

a フタン b カクホ c ムカ d キンム e コユウ

問二 傍線部①（ ）のいいについて、この部分が「自分の都合だけを考えて、他人のことなど全く考えない」という意味になるように、（ ）に適切な漢字一字を入れなさい。

問三 傍線部②「それ」の指す内容として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 家族と離れ離れに暮らしているほとんどの外国人労働者が、家族の写真を大切に持っていること。

イ 日本の主張は世界の多くの国の人々から、あまりに人権感覚に欠けていると考えられていること。

ウ 日本で単身赴任は人権蹂躪だといっても、社会的にはほとんど理解を得られないこと。

エ 世界には、家族と一緒に暮らせないと心が引き裂かれたように感じる人がたくさんいること。

問四 傍線部③「相手のものさしを自分に押しつけられる」とありますが、これはどういうことですか。本文の内容を踏まえて具体的に説明した次の文の（ ）ア、（ ）イ、（ ）に、それぞれ五字以上十字以内で適切な語句を本文中から抜き出して入れなさい。

（ ）ア （ ）イ （ ）に、日本人だつて単身赴任は珍しくないのだからという理由で、（ ）イ （ ）に単身赴任を求められること。

問五 傍線部④「おれには無理だな」とは、どういうことが「無理だ」というのですか。本文中の語句を用いて四〇字以内で答えなさい。なお、句読点も一字として数えます。

問六 傍線部⑤「ここがむずかしいところで」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 週末に仕事に出かけるのはよくて、自分だけの楽しみのために出かけるのはよくないと言いつ切るのはむずかしい、ということ。

イ 仕事を大切にする日本の社会では経済が発展し、トルコの人々までも幸福にしているといい切るのはむずかしい、ということ。

ウ トルコの価値観と日本の価値観を比べて、どちらがよいかをはっきりと言いつ切るのはむずかしい、ということ。

エ 家族を大切にするトルコの社会は、日本以上に発展していくことをあきらめていると言いつ切るのはむずかしい、ということ。

問七 本文の内容と合うものを次のア～エから二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 日本の経済が発展し豊かな国になったのは、日本人が家族と同じくらい仕事を大切にしたからである。

イ 多くのトルコ人は家族を大切にし、家族のためには仕事を二の次にすることが珍しくない。

ウ 日本では単身赴任は当たり前であり、ほとんどのヨーロッパ諸国でもそうである。

エ 自分のものでしを押しつけることで、より深い国際関係を築くことができる。

オ トルコ人の中には日本の労働慣行を知った上で、日本に出稼ぎに行きたいと考える人が多い。

カ 外国の人たちが何を大切にしているかを知ることが、その人たちを理解するためには重要である。

国語科(中)

国中平25

解答用紙

受験番号の記入欄は左端にあるので、忘れないこと。

問一	問二	問三		問四	問五
a					
b					
c					
d					
e					

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七
a						
b						

問一	問二	問三	問四	問五		問六	問七
a			ア				
b							
c							
え							
d							
e							

受験番号
